

国際交流事後活動ニュース

MACRO COSM

◎速報 総務庁青少年国際交流事業参加青年募集

●レポート アメリカ社会のボランティア活動

マクロコズム '95.3



(財)青少年国際交流推進センター

vol. 3



◀ 出航式で挨拶する
宮路和明政務次官



▲ 男女1名ずつ民族衣装を着て7か国勢ぞろい
（「にっぽん丸」スポーツ・デッキにて）

第21回東南アジア

第21回東南アジア青年の船は、1994年9月29日日本青年45名と各国N Lを乗せて東京港を出航、10月7日アセアン6か国の青年が参集国マレーシアで合流した。7か国からの参加青年315名は、訪問各国ごとの寄港地プログラムと航海中には船内活動を行い、11月14日の帰航後は9日間の日本でのプログラムを体験した。11月22日各国青年は無事帰国し、全事業が終了した。



▲ 参集国 マレーシア
セランゴール州スルタン代理に表敬訪問する林管理官と
各国ナショナル・リーダー



◀ シンガポール入港日
船上におけるシンガポール国旗掲揚式

▼ 船内での各国紹介（タイの民族舞踊）





▶ フィリピン
養護施設内の学校訪問。
人なつっこい子供たち
との別れが寂しかった。

◀ 日本
地方旅行でお世話になっ
た愛知県平和町



▼ ブルネイ 皇太子へ管理官と各国NLが表敬訪問
(ヌライ・イマン宮殿にて)



青年の船

「東南アジア青年の船」事業は、アセアン諸国と日本との共同声明に基づいて、昭和49年に開始されたものである。各国では、公式訪問・交流会・課題別視察などのプログラムの他に、ホームステイが必ず組まれているのが本事業の特徴である。船内では、7か国の青年が共同生活をする中でディスカッションや文化交流プログラム、クラブ活動などが、青年の自主性に基づいて行われる。



▲ タイのソクラ大学にてボランティア活動

▼ 船内でのディスカッション風景



▶ インドネシアでの
ホームステイ先にて



日・韓青少年指導者交流事業

「互いに身近な国となることを求めて」

両国政府が共同事業として行う日本・韓国青年親善交流事業は、日韓国交正常化 20 周年を契機に青年の親善交流を進める目的で相互交流として始められ、8 回目を迎えた。1992 年には、本事業を含めた政府間の青年交流を基盤に、韓国参加青年が中心となってソウル市に社団法人韓日青少年交流協会が設立されたが、この団体は韓・日青少年交流事業に参加した人とその交流の発展に寄与した人 300 名余で構成されている。

既参加青年組織間の交流である「日・韓青少年指導者交流事業」は、日本青年国際交流機構に対する韓日青少年交流協会からの「相互交流を積極的に推進しよう」という熱心な働きかけにより実現したものである。

第 1 回目の交流は、昨年 7 月 1 日から 5 日間の日程で金振叔会長を団長とする 10 名のメンバーを日本青年国際交流機構が招へいたことにより実現した。その際、今後の交流計画についての会議も行われ、平成 7 年度からは、20 名の相互交流が計画されている。

今回の韓国側による招へい実現は、未来に向けての交流の着実な歩みを確信させるものとなった。



日・韓青少年指導者交流事業（第 1 回派遣）

I Y E O 坂田顧問を団長、酒井副会長を副団長にして、10 名が 10 月 1 日から 5 日まで熱烈な歓迎を受けた。

10/1（到着）ソウル市「歓迎会」

／2 ウルサン市 早速支部での歓迎式・ホームステイ

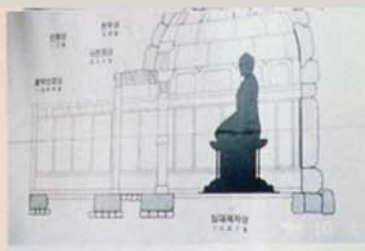
／3 ホームステイ家族と共に慶州観光・ソウルへ移動

／4 韓日青少年交流協会幹部との会議

文化体育部表敬訪問・歓送会

／5 国会議事堂訪問

（帰国）



第1回日・韓青少年指導者交流事業に参加して

「初めての国・韓国」

和田 操

(日本青年国際交流機構大阪府会員)

私が、一番強く感じた事は、この国と自分の国が近いという事です。歴史的つながりはさることながら、今の若者達が、日本を知ろうとしているパワーが、韓国と日本を近い関係にしているのです。今回出会った若者達からは一様に、そのパワーを感じました。また、街を歩いていると若者の多さに驚きました。多いというより、存在感があるのです。ここには、“若者の文化”があり、この国の文化の中心は彼らが創っていると思いました。

ホストファミリーの皆さんは、韓国語の分からない私に、たくさん話しかけて下さいました。勉強不足のまま、来訪してしまったという申し訳ない気持ちも、皆さんのおかげで次第にほぐれてゆき、会話集片手に身振り、手振りで行う会話の後は、肩をたたいての大笑いとなってゆきました。

今までは、言葉が出来ないと話しかける事も出来ず、ましてや交流なんて出来ないと思い、固く

なっていた気持ちがほぐれ、私の国際交流観もやさしく広くなりました。そして私は、私を暖かく受け入れて下さった方々ともっと近づきたい、話がしたい、もっともっと深い交流がしたいと強く思いました。私が、韓国語で冗談を言ったら、ホストファミリーの、あの明るく素敵なお父さんとお母さんは、目を丸くしてそして大声で笑ってくれるでしょう。それが、私が韓国へ近づきたいパワーの源です。

今回、こうした機会を与えて下さった方々に、心から感謝をすると共に、今後、両国の相互交流に微力ではありますが、力をそそぎたいと思います。



～主な内容～

日・韓青少年指導者交流事業 ……………5～6	都道府県青少年主管課(室)一覧……………14
アメリカ社会のボランティア活動……………7～9	日中青年3,000人交流 ……………15
青少年国際理解セミナー……………10	国際交流の在り方について(Ⅲ)……………16～19
世界青年の船課題別視察……………11	第16回日・中青年親善交流……………21
総務庁青少年国際交流事業募集……………12～13	第8回日・韓青年親善交流……………22

〈表紙の説明〉

タイランド・11才の
タリヤ・オウングパコーンさんの
「私の家族」
アジアのこども絵画展より
入賞作品

「出発点」

河北 麻紀

(日本青年国際交流機構大阪府会員)

韓国という国に興味を抱き、大好きになった一番の理由は、あたたかく私達を迎えて下さった人々のおかげだと思う。日本に対する彼らの姿勢は非常に前向きで、うかうかしてはられないと感じたのは、日本に戻ってから、たった1泊のホームステイでお世話になったホストファミリーのお父さんからの留守番電話の声を聞いた時だった。日本語はところどころで、ハングル中心ではあったが、気持ちは十分に伝わってきたような気がした。日本語をほとんど話せない韓国人と、ハングルの話せない私にとって、「ケンチャナヨ（大丈夫、なんとかなるさ）」という一言が合言葉だった。

ソウルで私達を迎えて下さった仁川支部所属の青年たちは、派遣団として来日した経験があり、支部での日本語講座のおかげか、流暢に日本語を話す人が多く、コミュニケーションで苦労することもなく、会話が弾んだ。私自身、学生ということで、幅広い年齢層の学生に驚いたが、男性は徴兵制のせいであると知り、日本との違いを改めて知った。同年代の青年との会話の中で、しかしながら韓国は日本の模倣が多く、ファッションは日本雑誌からの丸写しであることを聞き、うなずける部門もあった。やはり、日本に対する対抗意識はあるのだろうが、私は5日間の滞在中反日感情を持ち続けている人々との直接の接触はなかった。その点、過去を意識することなく交流することができた。

「ハイトビールあります。」

斉藤かおり

(日本青年国際交流機構東京都会員)

女人三名で押しかけたのは支部長徐さんのご一家。ソウルでの歓迎会では心なしか硬かった徐さんの頬は蔚山へ帰って少々弛み、真夜中過ぎにビールを呑もう！となるやいなや流行りのハイトビールをさげて表から戻った時には、純真な少年の如き会心の表情。ああ、またしても素敵なお出合いとなった。夜更けてなお眼ランランの子供二人、早朝からいきなり繁盛の銭湯、わかってないと知りつつ話続けるオモニは、挙げ句の果て元祖アカすりパフォーマンス。こんな我々一家の合言葉は「旨インダナ、コレガ。」

ソウルを離れる前に電話一本、「旨インダナ、コレガ。」帰国三日目の晩に電話がかかって「旨インダナ、コレガ。」

いい出合いができたこの人々とこれからも付き合い合っていきたい。お互いの言葉を少しずつ覚えながら末永く交流したい。またいつか絶対に会いたい。出合いの時はいつもこう思う。けれどその気持ちを持ち続け、実現するには少しばかり努力が要る。

日韓交流に尽力しようと思ったからには、思い出の人々に現実の世界で必ず、再会する。新たな経験を又一緒に積み上げる。年を重ねて来たなら互いに、次世代を育てる。国際交流の意味を一つ学んだ五日間、懐古主義というよりは現実主義、耽美というよりは濃厚、ハイトが似合うモツキムチ鍋味であった。

アメリカ社会のボランティア活動

～平等に与えられるボランティアの機会～

樋口 直美

(第11回東南アジア青年の船参加青年)

責任ある自主的ボランティア

米国社会は、ボランティアなくして成り立たない。日本では、役所や公共機関の職員がするだろう仕事も、米国ではボランティアがしている。

「政府を当てにしていないんです。地域住民一人一人のニーズに合った細やかなサービスを行政に求めるのは無理です。自分の住む地域をよくしたかったら、自分で行動するのが当然でしょう。」ボランティア・センターの職員の話だ。「ボランティアが雇用の機会を奪っている。」という議論すらあるが、地域社会への無償貢献を当然とす

る意識は、中流以上の米国人の間に深く根付いている。ボランティア・センターも民間の非営利団体だ。人口20万人の地方都市ダラムでも募集されている約千種類のボランティアの中から、各人の興味、専門、特殊能力に合ったものを無料で紹介してくれる。選択の幅が非常に広いので、職業人も退職者も専門を活かして活躍できる。興味ある分野を実戦で学ぶための手段としても、広く積極的に利用されている。未成年や高齢者用には、専門の各ボランティア・センターがある。



◀ ボランティアコーディネーターとナース

て尋ねたところ、この学校には盲目ではないけれど目の弱い女の子が一人いて、去年は彼女のクラスが2階になったので、彼女が安全に階段を上り下りできるようにテープを貼ったということだった。たった一人の子供のために全校中の階段にテープが貼られたのである。また、あるクラスではたった3人の子供が一人の先生について勉強していた。それは少し覚えの遅い子供たちのためのクラスで、それぞれの子供の能力に応じて指導しているとのことだった。集団の中にあっても個人を大切にすゝるイギリス教育のきめの細かさ、懐の深さを感じずにはいられなかった。



タンザニア

(ダルエスサラームーモロゴロードドマーザンジバルー)
モシーアルーシャ

楽しんだロスタイム?

気賀沢千代

タンザニアでの地を踏んでから3日目、私たちは思いがけない出来事により、「Hapa hapa, Tanzania (ここはタンザニアなのさ)」ということを実感した。

我々タンザニア団は、政治・経済の中心であるダルエスサラームを後にし、そこから内陸方面に492km離れた首都、ドドマに向かった。ドドマは

建設中の国会議事堂の屋根の上で(ドドマ市)



1973年に遷都が決定した後も、その開発は遅々として進まず、現在に至っても未だに首都機能を果たせていない。我々にとってはタンザニアに着いて以来、初のバスによる大移動であり、各々が期待に胸ふくらませての出発であった。しかし、バスは出発後、ものの1時間の地点で止まってしまった。ファンベルトが切れたということで、私たちは完全に足止めをくらったのだ。タンザニア人であるドライバーは、出発前に点検をするでもなく、予備を積むでもなく、偶然にも通りかかった彼の会社の車に乗って、ファンベルトを調達にダルエスサラームまで戻るといったのだ。いささか呆れた感もあったが、ただ、動かぬバスと一緒に彼の後ろ姿を見送るばかりだった。それからバスが再び動きだすまでの4時間、我々はそれぞれに楽しんで時を過ごした。バスの上に登ってハーモニカにあわせて大声で歌を歌いだす者もいれば、木陰でトランプをしたり、近くの村の子供を集めて手品に勤しむ者もいた。電話などの通信機能が発達し、車両部品も充実している日本に於いては、この4時間は大変な時間のロスの様に感じられたかもしれない。しかし、私たちは何もないタンザニアの地で、この4時間をこの上なく楽しんだ。そして何よりも、この時、自分たちがタンザニアにいることを実感していた。

ラオスから森がなくなったら……

JVC ラオス現地代表 松本 悟
(第11回東南アジア青年の船参加青年)

アセアンからインドシナへ

第11回東南アジア青年の船に乗ってから今年でちょうど10年。その間に大学を卒業し記者としてNHKに勤めたが、結婚を機に夫婦で一緒に人生を歩もうと忙しい記者を辞めた。運命の巡り合わせで8年ぶりにタイに来たのが92年4月。同年の7月からはラオスに住みNGO活動に加わっている。個人的に色々あった10年だが、この間インドシナも大きく変わった。ビザの取得がきわめて難しかったベトナム、カンボジア、ラオスは各々形を異にしているとは言え、対外開放の速度を速めている。経済制裁解除で市場として注目を集めているベトナム。新政権誕生によって一挙に外国企業が雪崩込んだカンボジア。その中においてラオスだけは今も日本人にはあまり馴染みがない。しかし、ベトナムと共に今やアセアン(東南アジア諸国連合)のオブザーバーに名を連ねている国である。

日本の本州ほどの国土に、静岡県よりやや多い430万人の人口を抱えている。1人当たりの国民所得は250ドルに満たない。数字の上では世界の最貧国に数えられる。ところが当のラオス人に聞くと「カンボジアは物騒な国だから行きたくない」「バングラデッシュに行ったが、何て貧しい国なんだと思った」「タイ料理は化学調味料の味が強くて食べる気がしない」などなど。

とどの詰まりが「やっぱりラオスがいい」と言うわけだ。

貧しくても豊かな国

ラオスには飢えがない。去年の収穫は米どころの南部で前年作の半分程度だった。確かに栄養失調から伝染病にかかって死亡するケースも報告されたが、飢餓は起きなかった。「これがエチオピアやソマリアだったら大規模な飢饉になって大騒ぎだったろうね。」緊急救援にあたった世界食料計画(WFP)の弁である。なぜ飢えなかったのか? WFPのスタッフはタイの英字新聞の取材

松脂を探っているところ。これを売って塩や服を買う。もちろん木は死なない。



青少年国際理解セミナー

「違いを知ることから、 同じであることを感じる」

平成6年12月4日(日)、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて青少年国際交流理解セミナーが開催された。本セミナーは、青年たちの柔軟な発想によりタイムリーなテーマを取り上げ、広く一般の人々に国際理解を深める場となることを目指している。今回は、平成6年度総務庁青年海外派遣事業で、中国・韓国・タンザニア・トンガ・ジョルダン・タイ・イギリスの各国へ派遣された青年たちの帰国報告及び分科会での意見交換が行われ、80余名が参加した。

(助)青少年国際交流推進センター山田馨司理事長、IYEO大森充会長、片桐裕実行委員長の開会挨拶に続き、スライド・民族衣装等を用いた各国約10分の派遣国別発表が行われた。午後には、経済、国際理解、社会生活、歴史の4テーマに分かれて分科会を開き、上記各国(韓国・イギリスを除く)から来日中のJICAの研修生8名を交えて活発な意見



が交換された。

また、別室の展示会場には総務庁青少年対策本部の国際交流事業の写真パネルを始め、派遣先各国を紹介する品々及び青年海外協力隊の写真パネル等が展示された。



(タンザニア派遣団副団長)
加藤 由美子



主催：(助)青少年国際交流推進センター
日本青年国際交流機構
東京都青年国際交流機構
後援：総務庁青少年対策本部



もっと「日本」を伝えよう!

「第7回世界青年の船」参加外国青年180名に対する日本国内プログラムの一つとして、1月12日、東京において課題別視察が実施されました。地方旅行、出航前直前研修も含めて10日間という短い滞在日程の中で、日本を少しでも深く知ってもらおうと45名の実行委員が工夫を凝らしてコースを考えました。

10分野14コースの訪問先を設定。各コースとも日本青年が3人一組となり、都内の一般見学と組み合わせ、地下鉄やバスなどの公共の交通機関を使用して移動することで、直接街並みや日本人の日常生活に接してもらうことを心がけました。

各公式訪問先での滞在時間は、2、3時間程度でしたが、外国青年たちは大変熱心に質問をして日本側の関係者を驚かせ、喜ばせもしました。

(今回のコース)

- I. 伝統文化 ①深川江戸資料館
②裏千家東京出張所
- II. 政治 ③国会見学と国会議員との懇談
- III. 司法 ④最高裁判所
- IV. 情報 ⑤朝日新聞社
- V. 福祉 ⑥特別養護老人ホーム
渋谷区けやきの苑・西原
⑦身障者授産所施設
世田谷区立世田谷福祉作業所
- VI. 教育 ⑧新宿区立落合第二小学校
⑨港区立御成門中学校

- VII. 経済 ⑩東京証券取引所
⑪東京都中央卸売市場（築地）
- VIII. スポーツ ⑫日本体育大学相撲部
- IX. 文化交流 ⑬国際交流基金
- X. 青年活動 ⑭友愛青年連盟

訪問先にグループで外国人を案内するときは……

- I. 最低3人一組でチームを組もう。
 - ① リーダーは、訪問先に詳しいか案内経験の豊かな人、又はまとめ役に慣れている人に。
 - ② 訪問先の説明が出来る程度の語学力を持つ人を一人含める。(相手側に通訳がいても)
 - ③ 残る一人は、必ず記録係としてカメラの用意を忘れずに。(この役割の人は、語学力がなくとも明るさと熱意があれば大丈夫。)
- II. 訪問先の資料の必要性はもちろんだが、その分野の全体が判る資料も提供してあげよう。
- III. グループの外国人数12、3名までが案内し易い。日本人を含めて15名程度に。
- IV. 訪問先の下見や打合せは、2名以上で。

日本体育大学相撲部にて
▼ 外国青年たちも「まわし」をつけてハッケヨイ!



速報

総務庁青少年国際交流事業の参加青年募集開始

総務庁の行う青少年国際交流は、日本と諸外国の青年の交流を通し、相互の友好と理解を促進し、広い国際的視野と国際協力の精神の育成を目指しています。

全国の青年の皆さんが、この事業に積極的に参加し、帰国後もその体験を活かして地域、職域、学校又は青少年団体において国際交流、社会に貢献されることを期待しています。平成7年度の事業概要、応募資格等は次表のとおりです。

		航空機による青年の海外派遣									世界青年	
訪問国等		ブラジル	コスタ ・リカ	デンマ ーク	シヨル ダン	ネパール	タイ	アメリカ	ソバ ブエ	中国	韓国	南アフリカ、スリ アラブ首長国連邦 南西アジア、中近東、ア 地域の12か国の青年 と共に船内で共同 から各国を訪問
		特定の拠点に滞在し、ボランティア活動や国際協力活動・ホームステイ・交流会などを行う。										
実施時期		平成7年9月～10月									平成8年1月～	
期間		約25日間						約20日間	約15日間	約65日間		
募集人員		各約8人						一般団員 中国 約15人 韓国 約25人		約100人		
資格	年齢	20歳～30歳（昭和39年4月2日～昭和50年4月1日に出生）						一般団員：20歳～29歳（昭和40年4月2日～昭和50年4月1日に出生）		20歳～29歳（昭和40年4月2日～昭和50年4月1日に出生）		
	青少年活動等	帰国後もその経験をいかして国際交流活動、青少年活動等を活発に										
要件	語学力	交流活動を円滑に行える英語力を有すること						訪問国の公用語による簡単な日常会話能力があれば望ましい		交流活動を円滑に行える英語力を有すること		
	その他	交流活動を円滑に行える英語力を有すること						訪問国の公用語による簡単な日常会話能力があれば望ましい		交流活動を円滑に行える英語力を有すること		
研修実施時期	事前	7月中旬の約5日間（於：東京）								8月下旬の約5日間		
	出発前	出発直前の約2日間（於：東京）								出航直前の約3日間		
	帰国後	帰国直後の約2日間（於：東京）								帰国直後の約2日間		
個人負担経費		約5～15万円								約20～30万円		
		〔内訳〕研修費（事前、出発前、帰国後）、事前研修参加に係る旅費、出発に際しての上京旅費、帰国後手続費用、旅行保険料等（居住地等により異なります）										

を有する次代を担うにふさわしい

交流活動、青少年活動等を活発に行

の 船	東南アジア青年の船
ランカ ・タンザニア アフリカ、ヨーロッパ 年約 175人 生活をしな	ブルネイ、インドネシア、 マレーシア、フィリピン、 シンガポール、タイ 〔アセアン6か国の青年 270人 と共に船内で共同生活をしな がら各国を訪問〕
3月	平成7年9月～11月
	約55日間
人	45人
昭和40年4月 1日に出生)	18歳～30歳(昭和39年4月 2日～昭和52年4月1日に出生)
行える者	
える英語力	交流活動を円滑に行える英語力 を有すること
応募はこの限りではない)	
(於：東京)	7月中旬の約5日間(於：東京)
(於：東京)	出航直前の約2日間(於：東京)
(於：東京)	日本国内活動直後の約2日間 (於：東京)
0万円	約12～22万円
後の帰郷旅費、船内供食費(船事業のみ)、渡航	

〈応募窓口及び募集機関〉

在住都道府県の青少年対策主管課(室)へお申し込み下さい。募集受付期間は都道府県によって異なります。また、選考方法も若干異なりますので、問い合わせは必ず在住する都道府県窓口にして下さい。

(次ページの各都道府県窓口一覧参照)

*航空機による海外派遣のうち、中国、韓国派遣については、一般団員とは別に、渉外団員2名(おおむね25～35歳で、訪問国の公用語に堪能な者)も募集しています。

渉外団員は、参加経験を問いません。

「第6回世界青年の船」参加者 谷口 智子

世界13か国から参加した我々300名の2か月間の共同生活は、まさに国際社会の縮図であった。人種をめぐりきわどい発言など厳しいやりとりもなされた。船という限られた空間で寝食を共にしたことで、いやでも本音の付き合いになるのだ。しかし不思議なことに、違いが明確になり、相手が実物大で見られるようになると、逆にそれを個性として尊重し互いに歩み寄る雰囲気生まれた。私自身、あの瞳の大きさゆえに漠然と苦手だったインド人達と最も仲良くなった。「偏見は無知から」ということを身をもって体験した。紙面では語り尽くせない貴重な経験だった。一緒に参加したメンバーに会うと必ず出る「また乗りたいね。」の一言が、このプログラムで得た絆の強さを示していると思う。

総務庁青少年対策本部

〒100 東京都千代田区霞が関3-1-1

合同庁舎第4号館

☎ 03(3580)5365 / 03(3581)2980

平成7年度事業日本参加青年募集担当都道府県主管課一覧

都道府県	主管課名	電話番号	募集期間
1 北海道	総務部知事室国際交流課	011-231-4111(内21-216)	3/13～4/14
2 青森県	生活福祉部青少年女性課	0177-22-1111(内2218)	3/17～4/17
3 岩手県	企画調整部青少年女性課	0196-51-3111(内2352)	3/6～4/14
4 宮城県	環境生活部青少年課	022-211-2559(直通)	4/3～4/25
5 秋田県	生活環境部青少年女性課	0188-60-1552(直通)	3/13～4/14
6 山形県	企画調整部青少年女性課	0236-30-2101(直通)	3/6～4/14
7 福島県	生活環境部青少年婦人課	0245-21-7187(直通)	3/15～4/14
8 茨城県	福祉部女性青少年課	0292-21-8111(内2744)	3/13～4/14
9 栃木県	県民生活部婦人青少年課	0286-23-3075(直通)	3/13～4/14
10 群馬県	教育委員会事務局文化スポーツ部青少年課	0272-23-1111(内4143)	3/6～4/12
11 埼玉県	県民部青少年課	048-830-2912(直通)	3/27～4/11
12 千葉県	社会部青少年女性課	043-223-2396(直通)	3/14～4/7
13 東京都	教育庁生涯学習部社会教育課	03-5321-1111(内54-441)	3/1～3/24(郵送)
14 神奈川県	県民部青少年室	045-201-1111(内3477)	3/13～3/31
15 新潟県	民生部女性児童課	025-285-5511(内2511～3)	3/中旬～4/14
16 富山県	生活環境部女性青少年課	0764-44-3138(直通)	3/1～4/14
17 石川県	県民生活局女性青少年課	0762-23-9111(直通)	3/17～4/17
18 福井県	県民生活部青少年女性課	0776-21-1111(内2365)	4/1～4/28
19 山梨県	企画県民局青少年女性課	0552-23-1357(直通)	3/16～4/17
20 長野県	社会部青少年家庭課	0262-35-7130(直通)	3/20～4/21
21 岐阜県	総務部青少年国際課	058-272-0810(直通)	3/1～4/21
22 静岡県	教育委員会事務局青少年課	054-221-3312(直通)	3/15～4/14
23 愛知県	総務部青少年女性室	052-961-2111(内2354)	3/下旬～4/19
24 三重県	福祉部青少年女性課	0592-24-2404(直通)	3/22～4/21
25 滋賀県	教育委員会事務局生涯学習課青少年対策室	0775-28-4661(直通)	3/15～4/14
26 京都府	総合府民部青少年課	075-414-4305(直通)	3/27～4/21
27 大阪府	生活文化部青少年課	06-941-0351(内4844)	3/10～4/10
28 兵庫県	(財)兵庫県青少年本部青少年交流担当	078-360-8581(直通)	3/15～4/14
29 奈良県	知事公室青少年課	0742-22-1101(内2375)	4/3～4/28
30 和歌山県	民生部青少年女性課	0734-41-2503(直通)	3/15～4/14
31 鳥取県	企画部青少年女性課	0857-26-7076(直通)	3/22～4/20
32 島根県	健康福祉部青少年家庭課	0852-22-5302(直通)	3/10～4/10
33 岡山県	企画部女性青少年対策室青少年課	086-224-2111(内2543)	3/1～4/10
34 広島県	県民生活部青少年女性課	082-228-2111(内2937)	3/14～4/20
35 山口県	企画部女性青少年課	0839-33-2634(直通)	3/17～4/17
36 徳島県	企画調整部青少年女性室	0886-21-2175(直通)	3/22～4/21
37 香川県	民生部青少年対策室	0878-31-1111(内2383)	3/6～4/20
38 愛媛県	県民福祉部婦人児童福祉課	0899-41-3434(直通)	3/1～3/31
39 高知県	総務部国際交流課	0888-23-9605(直通)	3/10～4/20
40 福岡県	企画振興部県民生活局青少年対策課	092-641-4740(直通)	3/13～4/14
41 佐賀県	福祉生活部児童青少年課	0952-25-7055(直通)	3/13～4/21
42 長崎県	教育庁生涯学習課	0958-24-1111(内3366)	3/1～4/20
43 熊本県	福祉生活部県民生活総室	096-383-1111(内3797)	4/3～4/17
44 大分県	福祉生活部女性青少年課	0975-36-1111(内2734)	3/14～4/13
45 宮崎県	企画調整部女性青少年課	0985-26-7041(直通)	3/6～4/14
46 鹿児島県	県民福祉部青少年女性課	0992-26-7961(直通)	3/1～4/5
47 沖縄県	生活福祉部青少年課	098-866-2182(直通)	3/15～4/15

※東京都への郵送による申し込みは、24日の消印まで有効です。

日中交流のあゆみ

「'84 中日青年友好交流」から 10年

秋田県青友会
阿野 広美

「未来は、青年のものだ。80年代の中日両国青年は、21世紀の建設者であり創造者である。21世紀に目をむけ、中日友好を一層うちかためるために、ともに奮闘しようではないか」これは後に送られてきた「中日友好21世紀委員会中国側委員会」写真記録集の巻頭の言葉の一部である。

1994年11月28日の夕暮れ時、中華人民共和国大使館の門をくぐった時、なんとも目眩のするような不思議な、安堵感というか生家に帰ったような気持ちでした。大きな感動を与えてくれたあの訪問から10年。記念パーティが間もなく始まろうとしていた。

途中、電車の中で、写真記録集を読みながら、なぜか泣けて泣けてしょうがなかった。10年前の10月1日に4コースに別れて参加した日本青年の3,000人は、天安門前のスタンドに席を占めて、建国50周年を祝う50万人の国慶節のパレードでクライマックスを迎えた。

私は、この10日間に与えられた自由時間（早朝と夜だけ）に町中に公園にと出かけ中国の青年や市民と交流をしていた。片言の中国語を、なんとかつなぎ、声にだし、筆談し握手し民謡を歌った。空港での別れに、溢れる涙をとめる者はだれ一人いなかった。

3年後、胡耀邦先生の辞任、1989年6月の天安門事件は胸が苦しく涙がでた。

交流パーティには、300人ほどの方が参加されていた。平日であったが、何が何でも参加したい



との希望、いや自分に対する義務感とも言える気持ちであった。

中国大使館の方のご挨拶は、聡明で自信のあふれたお話しであり、良かったと感じた。その席で秋田民謡「長持唄」を歌った。「青年の船の会」当時の10名のうち6名の仲間と再会でき、懐かしくもあり嬉しくもあった。私は昭和50年に第9回青年の船に乗船したのだが、船の思い出も味わうことができた。私の4人の子供にも、この思いを伝えていきたい。

今年の正月3日、近くの横手スキー場に子供たちと出かけた時、晴れた空の向こうに鳥海山が見えた。小学校3年生の娘に「鳥海山の向こうには何がある？」と尋ねると「中国だよ」と答えてくれた。中国大使館の皆さま、中国の皆さん、本当にありがとうございました。

21世紀に向かって日中友好交流、万歳!!

'84秋、中華人民共和国建国35周年を記念し、「中日友好交流事業」として日本青年3,000人が中国政府に招待されました。昨年11月28日中国大使館にて「中日友好交流10周年パーティー」が開催され、当時の派遣メンバーが招待されたものです。

国際交流の在り方について(講演)

Ⅲ. 言葉を越えた国際交流

上智大学法学部教授

猪口 邦子

基本的な礼儀作法

さて、それからあとは付け足しになりますが、国際交流をしていて、それについてのお礼状がきちっと来るということは非常に嬉しいことだと思います。日本では、「筆不精」という表現がありまして、手紙を書かないことのエクスキューズがあります。しかし、国際的に言えば、筆不精というのは、絶対に通用しない考えだと思います。人は手紙を書かなければならない、お礼状は書かなければならない、電話ではだめである、電話は人をわざわざ電話口に呼び出すので、失礼である。何か国際交流で自分がお世話になったり、何か恩恵にあずかったということがあれば、お手紙を書いてお礼を述べるという基本的な礼儀作法が、市民交流であれば一層重要なポイントであるだろうと思います。「ま、今度会った時にお礼を言えいいや。」というのは、国内だけで通用する、ある種の不作法だと思います。絶対に自分の手でしっかりと、簡単なメモでもいいからお礼状をだす、それが国際的な作法であると思います。

最大のおもてなし

それから最後に、市民的国際交流のポイントといますか、やってみてこれは非常によい、お勧めしたいと思うことは、自分の家に呼んでみる、ということです。これは非常に良いことです。ホテルに集まると言えば誰でも場所はわかるし、簡単に行けて楽であるところを、わざわざ個人宅まで行くのは大変だろう、というふうに思う方もいらっしゃると思います。忙しいとか色々な理由もあって、つい億劫になるという場合もあると思いますが、あまり気張らずに生活の現場に招き入れる、これは最大のおもてなしだと思います。日本ですと、家が小さいとか、それほどきれいにしていないとか、色々なエクスキューズを思いついてしまいますが、そういうことにエクスキューズを見い出している限り、本当に心のこもった国際交流というのは、どこかバイパスされていくような気がします。

南京での体験

私が感激した、ある国際交流の経験をお話したいと思います。ある時私は、中国から招待を受けまして、社会科学院というところで日中関係や国際関係などについてレクチャーをするなど、色々な仕事をしていました。ある時、旅行をすることになり、優秀な若い研究者の方が通訳についてくれて、北京から南の方に下り、視察をしていました。それは、南京の近くの小さな町のことだったんですが、そこで視察をするために駅に降り立ってタクシーをとりました。その当時、タクシーというのはまだ数も少なく、しかもほんの小さな車でした。その一つに2時間の契約で乗ったんですね。ところが、乗りましたら、その若い運転手が通訳とけんかを始めたんです。「なぜあんたは日本人の案内なんかしているんだ。我々がどういう目にあっただか知っているだろう。なぜこんな日本人なんか連れて、こんな所に来てニコニコしながら案内してるんだ。自分のやっていることが分かっているのか。」と言われて、通訳としては返す言葉がなくて、「だけどこれも自分の仕事だから。」と言って、「あんただって、この人をタクシーに乗せているじゃないか。」というふうに言い返した。とにかく非常に険悪なムードで、「なるほど、南京の近くに来るということは、こういうことなんだ。」と私はよくわかりました。

そして、2時間ぐらいたってちょうどその契約が切れる時間になり、「お前たち、どこへ降りた

いんだ。もう、どこでも降ろすから、サッサと行ってくれ。」という態度でした。「じゃあ、まあ、駅へ行くか。」と戻り始めたら、突然、ものすごい雷雨になったんです。あまりにも突然で凄まじくて、もう自動車自体も動かなくなるぐらいの大変な豪雨になってしまったんです。「とにかく、雨宿りができそうな所に降ろすから。」と色々全部行ったのですが、どこも雨宿りの人で満杯で、ものすごい人だかりになっていました。そこらじゅうグルグル廻っているんですが、うまくいかない。そのうちに私はあまり急に寒くなったので、頭痛がしてきて、「困ったな。」というふうに言ったら、突然タクシーの運転手が、「しょうがない。じゃあ、うちに来るか。」と言うんですよね。「ええ!」と言って、「そんな、悪いからいい。」と言ったら、「いや、うちへ来れば、母さんがお茶ぐらい出してくれるから、うちに来いよ。来ていいよ。」と言ってくれた。

私たちが着くと、そのご両親は仰天して、「日本人が来た!」。おそらくご親族の中には、大変不幸なことに会った方もいたと思いますが、もう大変な騒ぎになってしまい、「日本人を息子が連れてきた。どういうことだ。さっさと料金を取って追い払え。」というようなことを言っていました。長屋のような所でしたので、もうたくさんの人が出て来てしまい、口々にそのようなことを言っていました。その運転手は、「まあ、とにかく、この人、頭が痛いみたいだから、お茶を入れてやってくれ。」と言い、私たちは中へ通してもらいました。

ありのままの中国

私が今ここで申し上げたいのは、生活の水準の高さとか低さとか、そういうことがポイントではないということです。そこで案内された所は、私がもう見たこともないような、正式に北京政府から招待を受けて研究しているときには絶対に見ることができない、そういう中国の内部だったんですね。そして、その母親は、「まあ、とにかくあんたたち、こんなに雨が降っているんだし、大変だから入ってらっしゃい。」と言って、「こんな寒いときは風邪をひいたら大変だ。薬は持っているのか。」と、すごく心配してくれて、私がびしょ濡れでしたので、タオルを貸してくれ、お茶も出してくれました。

いくら待っていても、外はなかなか雨も止まず、そのうち夕方になってしまい、その母親が、「これから夕飯を作ってあげるから、待っていなさい。」と言うので、「じゃあ、私も台所を手伝う。」と言ったら、「あんたが見たこともないような台所で、仰天するだけだよ。」と言われたんですが、「でも、私、一緒に手伝う。」と言って、一緒にご飯を作りました。その時、その母親は、とても素晴らしい中国料理を作ってくれたんです。私は、中国語をいかにしにしかしゃべれないし、北京語と違いますので、言葉はもうぜんぜん通じませんでした。でも2時間、3時間と経つうちに、何か本当に言葉が通じたような錯覚に陥るほど、交流ができるんですね。そのお母さんは、最後には、「本

当にあなたは日本人だけれども、でも私たちが好きなタイプの日本人だ。」というふうに言ってくれました。ご飯も本当に心を込めて作ってくださいました。私は、中国料理の本格的な作り方というのをそこで初めて勉強したので、その後ずっと自分の家庭でも生かさせていただいています。

言葉を越えた交流

本当に不思議なもんですね。言葉は通じない。通訳の人がいるけれども、その若い運転手の青年とばかり中国語でがらがんしゃべっているの、私たちはそっちのけになっている。従って、私はそのお母さんと、家庭の色々な道具のこととか、洗濯をどうするとか、そんなことを聞いたり教えてもらったりしながら、あっという間に夕方の時間も過ぎて夜になってしまいました。今から考えても信じられないような経験でした。本当に心を救われたといいますか、本当に助けてもらった。窮地に陥ったとき、その一人の青年の判断で自分の家に来てよといってもらった。そしてまたそこでは、変な人が来たという中で、その母親に色々世話をしてもらった。

女性は何かを乗り越える、そういうたくましい、何か前向きなところがあるのかな、と思います。でもそれは女性だというよりも、やはり子どもを育てて何か家庭を切り盛りする中で、弱い立場の人を守らなければならないという、そういう認識かもしれないですね。その夜遅くなってから、さ

よならをし、ようやく列車を見つけて次の旅先に向かいました。最後にお母さんは私を抱きしめて「あなたは必ず中国に戻ってらっしゃい。その時にはもうちょっと中国語がうまくなっていなければだめですよ。」と言ってくれました。私は帰ってからその家の住所をなんとか捜し出してお礼状を書きました。その後も一年に一回ぐらい、シーズンズ・グリーティングスをその家庭に出すという交流を続けています。

国際交流の原点

私の国際交流の一つの原点は、アメリカで私を引き受けてくれた家庭と、中国で突然私たちを招き入れてくれたその家庭です。ですから、私が日本で何かやろうと思うときは、いつもそのことを思い出して、まずは家庭に招き入れてあげたいな、という気持ちでやっています。その努力をすると、何かもう急に文化に対する親近感が高まると思いますか、お互いの心で触れ合うものが非常に大きくなるという気がいたします。

言葉を学ぶ努力

さて、国際交流のポイントを考えますと、技術的なこともあると思います。国際交流のポイントとして、まず言葉ができること、と言う人も多いかもしれませんが、言葉は出来ればいいけれど、それは絶対条件ではない、ということです。言葉

以前の問題が非常に重要だ、と私は思います。でも、先程申し上げたように、相手の文化に理解を示すということの一環として、言葉は学ぶべきだと思います。やはり言葉にはその民族の歴史の全てが搭載されている気がします。相手の国の言葉を勉強しようとするときには、それなりの時間とエネルギーを割かなければならないので、勉強するということは相手の国に対する誠意でもある気がします。国際交流を、広く色々な国と展開するときには、全ての国の言葉をというわけにはいきませんが、自分がある国を選んでその国との交流ということを考えるときには、その現地語に対する努力をするのは当然だと思いますね。人には適不適があって、すぐ現地語を覚える人もいれば、なかなかうまくならない人もいると思いますが、その水準ではなくて、そういう時間と労力を割いているかどうか、ということではないかと思います。ですから、簡単なことでも言えるようになったら、それを相手にしっかり言ってみせるような、そういう誠意の積み重ねの中から、言語に対する自分の関心も湧くし、それから、言語が分かるようになって初めて分かる相手の国の文化の深さ、というものもある気がいたします。

(以下次号に続く)

IYEO たより

阪神大震災へのお見舞い

兵庫県を中心として、今回の地震の災害にあわれた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

今回、韓国及びアセアン各国の同窓会組織からは、お見舞いの言葉と支援の申し出がありましたことを報告させていただきます。特に、韓国の韓日青少年交流協会からは、ボランティア・メンバー派遣の申入れがあり、大阪 IYEO の受入れで協力を得ることとなりました。

また、外国青年たちの発案により「第7回世界青年の船」の団員が出航前に集めた義援金が、IYEO に託されました。IYEO では、出航前日の18日に行われた「世界青年の船リユニオン」での募金と併せて早速に支援物資を購入し、兵庫

編集後記

2 か月は短い。あっという間に第3号です。皆様からのご意見ご要望をお待ちしています。「こんな情報を」「この国を」など、欲しい内容をリクエストして下さい。また、個人の国際交流

*本誌の年間講読をご希望の方は、奨青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

IYEO と相談の上で被災地に送ることが出来ました。今後は、同封の「事後活動 Bulletin Board」にありますように、募金活動を含めて息の長い支援活動を行っていく予定ですので、ぜひご協力下さい。

「関東ブロック大会」日程変更のお知らせ

第2号で、関東ブロック大会（群馬県）は2月18・19日に開催とのお知らせをしましたが、3月18・19日に日程変更となりました。

年度末の忙しい時期ですが、群馬のメンバーが頑張っています。多くの皆様の参加をお待ちしています。

*同窓会たより

「第18回青年の船」では、10周年を行います。日程が決まり次第にご案内致します。

活動の原稿も大歓迎です。あなたの周りのユニークな活動も、ぜひ紹介を。

次号は、各地の活動紹介特集です。

（編集委員一同）

MACROCOSM（マクロコズム） 3月号 Vol.3 1995年3月1日発行（隔月発行）

編集：マクロコズム編集委員会

発行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

編集協力：総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定価：195円（本体189円）

印刷所：絢文社

TEL 03-3959-3960



◀ 政府要人と鈴木団長との会見



▶ 内モンゴルの草原で全員ジャンプ!

第16回日本・中国青年親善交流(派遣)

1994. 8. 28 ~ 9. 15

日中平和友好条約の締結を記念し、日本と中国両国政府の共同事業として昭和54年度に開始した事業で、二国間交流事業として我が国の青年約20名を中国に派遣するとともに、中国の青年約30名を我が国に招へいしている。

今年度の派遣は、ホームステイを含む北京への滞在、呼和浩特、包頭、武漢、上海という日程であった。派遣団は、鈴木栄団長を中心としてまとまりが良く、中国の人々のおおらかさと優しさ感激しながら過ごした19日間であった。



▲ モンゴル式の歓迎(歌を歌いながら、両手に長いスカーフを掲げ片手に持った銀杯でアルコール濃度53%の白酒を勧める。女性団員も挑戦)



◀ ホストファミリーと料理作り

ホフホト市(内モンゴル)での交流会
▼ (モンゴルの民族衣装を着ているのが日本人団員)





◀ 忠清南道庁訪問



◀ 緊迫の板門店にて

第8回日本・韓国青年親善交流（派遣）

1994. 8. 28 ~ 9. 15

昭和59年の日本・韓国共同声明及び日韓国交正常化20周年を踏まえ、両国の共同事業として昭和62年度に開始された。二国間交流事業として日本青年約20名を派遣し、韓国青年約30名を招へいしている。今年度は、関口弘治団長以下20名がソウル、釜山、束草、春川、そしてソウル市へ戻ってホームステイを含む19日間のプログラムを体験した。

▶ 慶州ナザレ園（老人ホーム）にて交流会



▼ 高麗大学を訪問しての交流会



▼ マッシュョ！ 本場のブルコギを食べる

